

<目的> 高齢者にとってより快適な温熱環境とは何かを考えるために高齢者住宅の温熱環境の実態調査を行い、その問題点を検討する。

<方法> 新潟市内の高齢者の住宅を対象に聞き取り調査と温熱環境の測定を行った。温熱環境の測定は、高齢者が日常使用している場所を中心に行った。測定期間は1987年12月6日～12月15日である。また、期間中1日の体温・温冷感・着衣状況を調べた。

<結果> 1) 寒さへの対処の仕方: 日中は居間でほとんどの時間を過ごしているが、暖房は居間のみが多く、「炬燵とストーブ」という住宅と、炬燵は終日使用するがストーブは朝と夕食時から就寝前までだけという住宅に分けられた。後者の高齢者の昼の着衣量は前者より高い傾向にあった。寝室は室温より寝床内温度を高める工夫をしていた。 2) 温熱環境の実態: 各住宅の居間の最高室温は約11～28℃で、起床時から就寝時までの居間の室温較差は5～21℃くらいであった。その間の台所とのおよその温度差は最高で3～20℃、トイレとの差は5～20℃と、各住宅で顕著な差がみられた。また、就寝中の寝室は7～11℃、トイレは6～8℃であった。 3) 高齢者の温熱環境評価: 聞き取り調査では、居間は「暖かい」、寝室・台所は「寒い」と評価する傾向があった。測定期間中に実施した温冷感申告（居間に在室）では、日中は全員が「暖かい」と評価する傾向があったが、朝と夜は「寒い」～「暖かい」でばらつきがみられた。各住宅により温熱環境が異なるため、PMVを算出し高齢者の温冷感と比較した。高齢者は炬燵に入っているため、PMV値より高い値であっても当然であるが、申告では全般的にやや低めに（特に暖房時間の短い住宅の高齢者は）感じていた。